京都の「通り名」は、
いかに変えられてきたか？

私たち京都市民が、ふだんなにげなく使っている京都の通り名（「丸太町通」、「御池通」など）は、ずっと昔から、つまり千二百年前の平安遷都以来使っているものと思っておられるでしょうか？あるいは、なんで丸太町通り、御池通りと呼ぶのだろうと素朴な疑問を持たれる方も多いのではないでしょうか？

794 年の平安京遷都当時、京都の通りは、南北方向には朱雀大路を中心として十一の大路とその間の小路、東西方向には一条から九条までの大路とその間の小路からなっていました。ところが、それらの中には、その後様々な要因により、通り名が改変されたものも多くあります。

右表は、平安京の大路・小路名の改変の由来（※）を、沿道の人々の活動（●）、池、川、木などの自然の特徴（▲）、固有の建物（■）、言い伝え（◎）に分類しまとめたものです。

この表から、一条～九条など「序数」を使って南北の位置関係をあらわした平安京の東西の通り名は、現在もすべてが使われていることがわかります。ただし、当時の「五条大路」は、現在「松原通」と呼ばれており、現在の「五条通」は、当初の「五条大路」よりもすこし南の通りとなっています。そのいきさつは、当初の「五条通」に面していた玉津島神社の並木の松の木が繁っていたため、人々から「松原通」と呼ばれるようになったから、と大正時代の地誌「坊目誌」に記されています。

凡例：通り名改変の由来類型

- ●沿道の人々の活動の特徴（13）：中（下）立売通、上（下）長者町通、丸太町通、竹屋町通、花屋町通、中（下）数珠屋町通、木津屋橋通、寺町通、柳馬場通、新町通
- ▲池、川、木（松）などの自然の特徴（5）：出水通、夷川通、御池通、松原通、柳馬場通、
- ■固有の建物等によるもの（4）：蛸薬師通、仏光寺通、五条（大橋）通、東寺通
- ◎言い伝え（1）：千本通

表：平安京の大路小路名の改変の由来

平安京の通り名（変遷名）	現在の通り名（改変時期）	通り名改変の由来	類型	由来出典
＜東西の通り＞				
一条大路		改変なし		
正親町小路	中立売通（近世）	呉服たな。きぬまき物を裁ち縫い売る	●	京雀
土御門大路	上長者町通（近世）	金穀を用達する裕福な者が住んでいた	●	坊目誌
鷹司小路	下長者町通	同上	●	同上
近衛大路	出水通（近世）	烏丸の西に湧泉があり道路に浸水	▲	同上
勘解由小路	下立売通（近世）	呉服たな。きぬまき物を裁ち縫い売る	●	京雀
中御門大路	丸太町通（近世）	材木屋が多かった	●	同上
春日小路	丸太町通（近世）	同上	●	同上
大炊御門大路	竹屋町通（近世）	竹を商う者が多かった	●	京町鑑
冷泉小路	夷川通（近世）	夷川という小川の流域	▲	坊目誌
二条大路、押小路		改変なし		
三条坊門小路	御池通（近世）	神泉苑の前通り	▲	京町鑑
姉小路、三条大路、六角小路		改変なし		
四条坊門小路	蛸薬師通（近世）	蛸薬師の移転後	■	京雀
錦小路、四条大路、綾小路		改変なし		
五条坊門小路	仏光寺通（近世）	仏光寺が高倉に移転後	■	坊目誌
高辻小路		改変なし		
五条大路	松原通（近世）	玉津島神社に松並木が繁っていた	▲	坊目誌
六条坊門小路	五条通（近世）	五条大橋通りと呼ばれていた。	■	京町鑑
揚梅小路、六条大路		改変なし		
左女牛小路	花屋町通（明治以降）	花屋町、生花を販売する家があった	●	坊目誌
七条坊門通り	中数珠屋町通（近世以降）			同上
北小路（太鼓番屋筋）	下数珠屋町通（近世以降）			同上
七条大路		改変なし		
塩小路	木津屋橋通（近世）	酢を商う家があった	●	京町鑑
八条坊門小路	塩小路通	塩小路は現在より少し北にあった		
梅小路、八条大路、針小路		改変なし		
九条坊門小路	東寺通	真ん中に東寺がある	■	
信濃小路	－	現在は使われていない。		
九条大路		改変なし		
＜南北の通り＞				
東京極大路	寺町通（近世）	豊臣秀吉による洛中散在寺院の強制移住	●	坊目誌
万里小路、	柳馬場通（近世）	馬揃えが行われ、柳が植えられた	●▲	坊目誌
富小路、高倉小路、東洞院大路、烏丸小路、室町小路		改変なし		
町尻小路（町小路）	新町通（近世）	秀吉の再開発以降、新たに建てられた	●	京町鑑
西洞院大路、油小路、堀川小路、猪熊小路、大宮大路、櫛司小路、壬生大路、坊城小路		改変なし		
朱雀大路	千本通（中世）	地蓮台野への路に卒塔婆を建て供養した言い伝え	◎	山州名跡志
朱雀大路より西の現在の通りは、平安京の通りから位置がずれており、通り名の改変とは考えにくいため省略。				

一方、「三条坊門小路」など七本の「坊門小路」は、すべて通り名が改変されています。〇条＋坊門という複合的な名称は、シンプルでないため、一般の人々には覚えにくかったのではないかと想像されます。

ちなみに、「三条坊門小路」は、近世に「御池通」と呼び名が変わりました。「御池通」の由来は、神泉苑（池）の前通りだったからと、江戸時代に刊行された京都の地誌「京町鑑」に記されています。「三条坊門小路」という複雑な名前より、有名な池の前通りと覚える方が覚えやすかったのでしょう。同じように「四条坊門小路」は、「蛸薬師通」と名を変えています。当初室町二条下ルにあった蛸薬師（永福寺）のお堂が、江戸時代初期に現在の地に引っ越してきて以降、「蛸薬師通」と呼ばれています。

始めに例としてあげた丸太町通りは、当初「春日小路」と呼ばれていましたが、沿道に材木屋が多かったから、「丸太町通」と呼ばれるようになった、と江戸時代初期の地誌「京雀」に記されています。

そのほか少し変わったものでは、「千本通」は、「延喜帝（＝醍醐天皇）のため、卒塔婆を千本立てた」という言い伝えから、当初の通り名「朱雀大路」が「千本通」と呼ばれるようになったと、江戸時代の地誌「山州名跡志」に記されています。

この表から、一条、二条等の序数を使った通り名がすべて残っている一方、**平安京当初の通り名が複合的なもの**であったり、**沿道に、商人・職人などの人々の活動（● 13)、池・川・木などの自然（▲ 5)、固有の建築物等（■ 4)、言い伝え（◎ 1）など、特徴ある事物が現れた場合には、当初の通り名がこれらの個性を表したものに改変されてきた**ことがわかります（カッコ内は該当数)。

ところで、近世初期に計画的につくられた城下町、飛騨高山、越前大野、伊賀上野では、当初の序数を用いた通り名（それぞれ、上一之町、七間通り、三之町通など）は、現在でも使われております。これらの都市の街路も、京都の街路と同じように、**都市内での位置関係がわかりやすいグリッド状街路**であるという共通点があります。

また、近世初期につくられた城下町の通りの多くに、商人や職人町の名前が付けられたことから、沿道の人々の活動が通り名になった京都も、その例外ではなかったことがうかがえます。

通り名は、都市とそこに住む人々との、都市のイメージのキャッチボールの証であり、その結果、京都が現在のような通り名を持ち、豊かな意味空間を持つまちになったのではないでしょうか。

ここでは、平安京の大路・小路のみについてみてきましたが、みなさんも、いちど身の回りの通り名の由来を調べてみてはいかがでしょうか。そこには、京都のまちとそこに住む人々のとかかわりの歴史が埋め込まれているかもしれません。

※　通り名の由来と改変時期は、下村邦彦, 日本歴史地名体系第二七号「京都市の地名」　株式会社平凡社, 1979 による。

（平成 23 年 6 月 19 日　日本建築学会近畿支部研究発表会で口頭発表した「日本の計画都市の通り名に関する研究-ニュータウンと京都、城下町の通り名の比較-」の一部を再構成した。）

藤原篤建築・都市設計研究所
取締役　藤原篤
博士（工学）